

# 伝説の美女

## との邂逅

千葉県市川市の亀井院には、真間の井と呼ばれる井戸があります。この名は万葉歌にもよまれています。

勝鹿かつしかの 真間ままの井を見れば 立ち  
平ならし 水汲くみましけむ 手兒てこ奈なし思  
ほゆ (巻九—一八〇八)

この歌は、高橋虫麻呂の歌集から『万葉集』に採られた歌のひとつです。勝鹿の真間の井戸を見ると、そこに通ってきては水を汲んだであろう手兒奈のことが思われる、という内容です。

勝鹿とは葛飾のことであり、かつては下総国の郡名のひとつでした。隅田川しよまたがわの東側、現在の東京都・千葉県・埼玉県にまたがる地の呼び名です。この歌によまれた真間の地は、江戸川を挟



真間の井

んで千葉県にあたります。崖のことを古いことばでママといい、いま国府台とよばれている台地のあたりを指すと考えられます。国府台という地名が示すとおり、ここに下総国の国府がおかれていました。

まさにその台地付近には、先にあげた真間の井や手兒奈靈堂など、手兒奈ゆかりの地とされる場所が点在しています。千三百年も昔の人物への記憶が、現代の生活の中にも息づいていることに驚かされます。

手兒奈とは女性への親しみのこもつ

た通称で、勝鹿の真間の地にいる娘という意味でしかありません。しかし、彼地の娘といえは皆がすぐにわかるほどの伝説の美女がいたようです。

山部赤人の歌(巻三—四三—四三三)や東歌(巻十四—三三八四、三三八五)にもよまれています。これらの歌をみると、貧しい身分ではあるが絶世の美女でたくさんの男達に求愛された、という手兒奈像が浮かんできます。

虫麻呂がこの歌をよんだ当時も、すでに真間の手兒奈は伝説上の人物でした。長歌(巻九—一八〇七)では、昔あつたこととして今まで絶えることなく言い伝えてきた話だとうたいはじめられ、手兒奈の貧しい服装や美しい容貌が事細かに表現されています。まるで目の前で伝説が再現されているかのようです。虫麻呂の想像力は臨場感あふれる作品を生み、歌を読むたびに彼女を生き返らせてくれます。

(万葉古代学研究所主任研究員・井上さやか)